

富岡美子作 「エス・アイ・エヌ」

(効果音) (時計の「チクタク」の音)

進藤由紀子(モノローグ) 静かな夜…。なんて静かな夜なんだろう。冬休みも今日で終わりか…。「あーあ、また明日から学校か～」って思うと、憂うつになってくる。でも、由美や恵理にも合えるし、何よりも大好きな佐藤君といつも一緒にいられるからな。——佐藤君てば、年賀状出したのに、とうとう返事が来なかった。ずっと待ってたのに…。

(効果音) (戸の開閉)

母 由紀子、まだ起きてたの？ 早く寝ないと、明日の朝起きられないわよ。3学期早々遅刻なんてみっともないじゃない。

由紀子 うるさいなー。子供じゃないんだからほっといてよ！

母 まだ子供のくせに何言ってるのよ。そうそう、あなたあてに年賀状が届いてたわ。はい、これ。お父さんあての中に紛れ込んでね。2日前に来てたみたい。

由紀子 全くもう。何やってんのよ。早く貸して。

母 あなたに男の子から来るなんて珍しいわね。一体どこのだれ？

由紀子 だれだっていいでしょ。それより早く行ってよ。

母 はいはい。

由紀子(モノローグ) だれからかな？ 佐藤裕二、やったー！ やっと来た。「進藤さん、年賀状ありがとう。今年もよろしく。」ずいぶんあっさりしてるな。でもまあいいや。さあ明日から学校。頑張らなくちゃ。

ナレーション 3学期を前に、なかなか寝つかれないのは進藤由紀子。中学2年生。半ばあきらめかけていたあこがれの佐藤君からの年賀状を手にし、彼とデートしている自分を想像したりして、ますます眠れない由紀子でした。  
次の日、学校で——。

由紀子 おはよう。由美、冬休みどうだった？

富樫由美 (眠そうに)おはよう。3学期早々、いつになく張り切ってるね。何かいいことでもあったの？ あたしは眠くて仕方ないよ。やっとの思いでここまで来たのにさ。何よ、にやけちゃって。一人でルンルンしてないで、あたしにも教えてよ。

由紀子 実はね、来たのよ。

由美 何が？

由紀子 年賀状。

由美 え、年賀状？ そりゃあたしにだっていっぱい来たよ。

由紀子 違うんだな。由美はあたしの気持ち全然分かってないんだから。親友なのに。

由美 親友だって、由紀子の心の中まで分かるわけじゃないじゃん。神様じゃあるまいし。それより早く教えて。

由紀子 あのね。あたし、もらっちゃったんだ、年賀状、佐藤君から。

由美 え、“佐藤君”って、あのガリ勉の佐藤君？

由紀子 ガリ勉じゃないよ。ただ勉強が好きだけよ。

由美 そんなにムキにならないで。でも、由紀子が佐藤君のことを好きだったなんて、知らなかった。いつも勉強で1、2位を争っているから、由紀子は佐藤君に対してライバル意識しか持っていないのかと思ってた。由紀子が佐藤君のことをねー……。意外だったなあ。

女子 聞いちゃった、聞いちゃった。いいこと聞いちゃった。ガリ勉がガリ勉に恋してるなんて、へー、オドロキ！ ガリ勉のお二人さんには勉強することしか頭にないのかと思ったら、人を好きになるってこともあるのね。さーて、皆に知らせなきゃ。

由美 何よ、あんた、また人の話を盗み聞きしてたの？ ちょっと待ちなさいよ！（女子、走り去る）あーあ、行っちゃった。ヤバい人に聞かれちゃったね。よりによってあの“ニュース屋”に聞かれてしまうとは。もうクラス中に広まっちゃってるよ。

由紀子 ヤだ、もう。由美は人のことだと思って。由美のせいよ、あんなに大きな声で話すから。

ナレーション と言いながらも由紀子は、「今ごろクラス中は、あたしたちのことで持ちきりだわ」という思いで、有頂天になっていました。案の定、クラスは今入ったニュースで騒然としていました。

女子 由紀子女史にも“乙女心”ってものがあつたのかー。

男子 その“乙女心”っていうのが怪しいんだよな。進藤は、乙女心で佐藤の心を揺さぶって、このクラスのトップの座をねらってるんじゃないのか？

由美 そんな言い方ってないでしょ。あんたはテストのたんび、下のほうで、フウフウ言ってるからひがんでるんでしょ。男のくせにみっともない。

男子 なんだよ。

由美 何よ。文句があるなら言ってごらんなさいよ。

由紀子 やめてよ、由美。あたしたちのことでケンカしないで。

女史 “あたしたち”か。うらやましい。

ナレーション 由紀子の佐藤君への思いが公然となってからというもの、皆は二人の行いを観察しては、何かと話題にするようになりました。そんなある日――。

由紀子 ただいま。

母 お帰り。由紀子、最近いやに張り切ってるじゃない。何かいいことでもあったの？

由紀子 別に。

母 あ、そうそう、あなたにヘンな手紙来てたわよ。差出人が書いてないの。はい、これ。

由紀子(モノローグ) だれからかなあ。あっちで見ようっと。

(効果音) (手紙を封筒から取り出す)

由紀子(モノローグ) あ、佐藤君からだ。なんだかどきどきしちゃう。えーと…「佐藤さんへ。君が僕に好意を持っていることを(佐藤君の声に)この前、初めて知った。クラスの皆が君と僕のことを好き勝手にせん索しているようだけど、はっきり言って僕は迷惑している。君は皆に注目されていい気分なんだろうけど、僕にとっては勉強の妨げになるんだ。今、僕は来年の高校受験のことで頭がいっぱいなんだ。僕は君のことをライバルとしか見ることができない。僕のことを考えるのはやめてほしい。佐藤。」…佐藤君が迷惑がってる…。

(音楽) (鋭くショッキング)

ナレーション 期待に胸を躍らせながら読み始めた由紀子にとって、この手紙は大きなショックを与えました。

由紀子(モノローグ) 佐藤君はあたしのことをライバルとしか見てくれなかったんだ。あたしが皆にチャホヤされているのを、佐藤君は軽べつしてたんだ。

佐藤 (回想 エコー) 君は皆に注目されていい気分なんだろうけど…。

(効果音) (由紀子の走り去る音)

母 由紀子、由紀子、もうご飯よ。こんな時間にどこ行くの？ 由紀子！

(効果音) (戸を閉める音)

由紀子(モノローグ) あたし、もう学校なんか行くのイヤ！ 佐藤君にあんなふうにしかわれていなかったなんて。だれもあたしの気持ちなんか分かっていないんだ。学校へ行けば、皆の物笑いの種になるんだ。

男子たち(エコー) なーんだ、やっぱり進藤由紀子の片思いだったのか。つまんねえの。(笑い)

由紀子 もうイヤ、何もかもイヤ！

ナレーション いつの間にか、歩道橋の上に来ていた由紀子は、力なくそこにくずおれてしまいました。

兄 (近寄って) 由紀子、こんなところにいたのか。ずいぶん捜したぞ。母さんも心配している。早く帰ろう。

ナレーション それは大学1年になる由紀子の兄でした。

由紀子 あたしのことなんてほっといてよ。独りにしといて！

兄 由紀子、父さんも母さんも心配している。

由紀子 ウソよ。だれもあたしのことなんて分かりやしないのよ。もう死じたい。

兄 何をバカなこと言ってる。さあ、行こう。(手をつかんで引いていこうとする。)

由紀子 話して、お兄ちゃん。離してってば！

兄 由紀子！（ほおをぶつ）  
ナレーション 初めて兄にぶたれた由紀子は、驚きのあまり言葉を返すことができませんでした。由紀子の兄は高校生の時、教会へ行くようになり、今はイエス・キリストを信じるクリスチャンでした。そんな兄を由紀子は心ひそかに尊敬し、子とあるごとに相談に乗ってもらっていました。打たれたほおに涙を流しながら、由紀子は自分の心のうちを話しました。

兄 ……そうか。（間）由紀子。由紀子は「罪」という言葉を英語でなんて言うか知ってるか？

由紀子 「罪」？ 「罪」って、警察のお世話になるような悪いことをすることでしょ？ 英語で？ ええと、習ったかなあ。

兄 それじゃ一つ単語を教えてあげよう。「罪」を英語で言うと「サイン」、スペルは「SIN」。

由紀子 ふーん。それがどうしたの？

兄 エス、アイ、エヌ。SIN。SとNの間にIがあるだろう？ 英語で「I」はどんな意味だ？

由紀子 「I」？ ええと、「自分」とか「わたし」とか…。

兄 うん、つまり「罪」という英語は、「I、自分、わたし」が中心になってるんだ。由紀子の学校へ行きたくない理由は、佐藤君に失恋したからだろう？ でも、それだけか？

由紀子 「それだけ」って？

兄 由紀子は、いつも自分がクラスの中心にいないと気が済まないんだろう？

由紀子 え？

兄 そして、自分の好きな佐藤君も、きっと自分のこと、好きだと思っていたのが単なる片思いで、彼にもクラスのみんなにも顔向けできない。つまりは、由紀子のちっちゃな自尊心はズタズタになったわけだ。

由紀子 ……悔しいけど、お兄ちゃんの言うとおりで。けど、どうして分かるの？

兄 分かるさ、それくらい。僕の妹だからな。僕にもそういうところがあったんだ。

由紀子 え、お兄ちゃんにも？

兄 うん。そういう心がいつも周りの人を傷つけ、自分も落ち込んで、そのたびに自分が惨めでたまんなかった。「なんとかしなきゃ」と思って教会にいったんだ。——由紀子、そうやって自分、自分って生きてると、本当の友達も、恋人もできないぞ。いくら外側がカワイユークても、心が汚きやダメだ。そういうの、“心ブス”っていうんだ。

由紀子 えー、“心ブス”？

兄 そう。君が本当に佐藤君のこと好きで、彼にも好かれたいと思ってるなら、その「I」を捨てなきゃダメだな。

由紀子 つまり、自分を捨てるってこと？

兄 そう。難しいけどな。お兄ちゃんだって、何度も何度も失敗の繰り返しだ。でもな、聖書にこんな言葉があるんだ。「何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。」どうだ、いい言葉だろ。イエス様の言葉だ。さ、気を取り直して、これから佐藤君やクラスの一人一人にも、“もし自分が佐藤君なら”って、相手の身になって接していくようにしてごらん。自分が変われば、きっと周りも由紀子を受け入れてくれるよ。

由紀子 だけど、どうしたら心ん中 変えられるの？ 全然自信ないよ。

兄 よし、新しい年の初めだ。今度の日曜、お兄ちゃんと一緒に教会に行ってみるか！

ナレーション 由紀子は、兄の明るい声に、思わずうなずきました。辺りはもうすっかり暗くなり、北風が肌を刺すようでしたが、兄が掛けてくれたオーバーの暖かさは、由紀子の心の中も溶かしていくようでした。

由紀子(モノローグ) イエス様か。わたしも変えられるかも…。

ナレーション 由紀子は、心の中でそうつぶやきながら、歩き出したのでした。

<完>